中学校における歴史研究と歴史学習の協働に関する史的考察

―愛知県横須賀中学校「郷土クラブ」の実践の分析を通して―

白井克尚

一、はじめに

第二の砂丘ができ
第三の砂丘ができ
木曽川は海の向こうから砂を送り
鈴鹿おろしは砂を吹きあげて
浜はだんだん先へでた。
やがて、入り江はうまってしまい
真直ぐな海岸となった。

戦時中に防空壕を掘った時
家の下に貝層がみつけられた
サルボウにハマグリ、シオフキ
木曽川の砂の上に発展した町の歴史
今も地面の下から語られている。
（秋田昇が海岸線の移りかわりを調べた時にうたった詩）

この詩は、愛知県知多郡横須賀町立横須賀中学校（現東海市立）の生徒が、クラブ活動の中で遺跡の発掘調査に参加した後に書いたものである。郷土の知多半島について歴史地理的な把握がなされ、遺跡や遺物を調査する喜びや、その土地に生きた過去の人々の生活を考察しようとする意欲に満ちあふれている。かつて、愛知県下において、中学生が自分たちの住む身近な地域の歴史について、考古学的手法を通して研究と学習を行うという取り組みがあった。それが、一九五〇年代前半における横須賀中学校「郷土クラブ」の実践である。

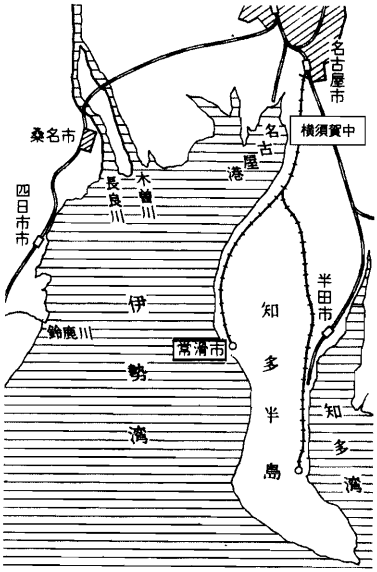
この取り組みは、「考古学と郷土教育　中学校の部」（和島誠一編　一九五六　『日本考古学講座　第一巻　考古学研究法』河出書房）において紹介され、全国的にも注目を集めた実践である。同クラブの顧問は、知多社会科同好会会長を務め、愛知県下において社会科教師としての専門性育成にも奔走した杉崎章であった。では、一九五〇年代前半

における横須賀中学校「郷土クラブ」の実践とは、いかなる活動であったのか、また、そこでの子どもの学習はどのようなものになっていたか。本稿においては、「郷土クラブ」が残した調査日誌や生徒の作文等の分析を通して、実践の実態を探り考察していきたい。

二、「郷土クラブ」の実践の背景

知多半島の南知多町で幼少期を過ごした山下勝年は、昭和三〇年代の当地域の風景について次のように回顧している。

確かに毎日が楽しかった。夏はやがて今よりひどく暑く、冬はずっと寒かった。生活は季節と共に巡り、正月や盆や祭りの他、初午や秋葉講や恵比寿講などの行事も、ずっと意味あるものとして存在し、その全てが子供たちの楽しみであった。川や海の水は澄み、生きもので溢れていたように思う。田舎の子供の誰もがそうであるように、私も魚とりや釣りが大好きであった。（山下　一九九五　一二四頁）



資料１　知多半島の地形
（杉崎　1970　13頁より）

こうした牧歌的な海浜集落の状況が、当時の知多半島にはあった。しかしまた一方で、戦後の経済成長に伴う、港湾開発事業が進められ、海岸線の埋め立てが行われたのもこの時期である。当時の横須賀町においては、一九四四年、四五年と続いた震害により海底の地盤沈下が起こり、防波堤のかさ上げを行ったが、遠浅の港内のため機帆船などの大型化につれて出入船舶の支障が目立ち、港勢は不振の一路をたどったという。そこで、一九四九年頃から、大々的に港内の開発を行い、埋め立てを行っている（横須賀町史編纂委員会編　一九六九　七六七頁）。現在の、名古屋港臨海工業地帯、衣浦臨海工業地帯に当たる元浜埋め立て地である。

また、一九五三年九月二十五日に知多半島を襲った伊勢湾台風が、農業生産に大打撃をもたらしていた。新田は五か所、延長一八九メートルにおよぶ大決壊を来し、特産早

生白玉ねぎの金城湯池とうたわれた十五町六反余畝歩のよく野が、一瞬にして濁潮うず巻く海面下に埋没してしまったという（同前、同書、七二五頁）。そこで、塩害を受けた開拓地には、客土として遺跡の土砂が運搬されていた。隣接する八幡町においても、土地が砂質であることから乾燥を少しでも防ぐために、機会あるごとに土取りが行われていた（八幡町史編纂委員会　一九五六　一〇頁）。これらの行為が、地域の遺跡の発見にもつながり、また遺跡の破壊にもつながっていたのである。

そして、一九五〇年代前半の歴史的状況として、「国民的歴史学運動」が隆盛していたことがあげられる。それは、敗戦を経験した「国民」が、皇国史観の克服を目指し、真実の「科学」に基づいた歴史を知るために、地域社会における郷土史の発掘を行うという運動であった。愛知県下においては、豊橋市「瓜郷遺跡」の発掘調査が、地元の教師や小・中学生の主体により行われていたことに象徴されている。

さらに、学校教育においては、戦前からの郷土教育の流れを引き継ぎつつ、地域社会での考古遺物に対する啓蒙的な活動がすすんで行われていた。当時、千葉県富里村の小学校教師であった相川日出雄は、スライド制作を通した郷土教育の実践（相川　一九五二）や、考古学的手法を活用した地歴教育の実践（相川　一九五四）を報告している。こうした遺跡や遺物を通した郷土教育が盛んに行れていたことは、一九五一年度版『中学校学習指導要領・社会科編日本史（C）案』において、「遺物や遺跡を見学調査し、歴史を科学的に取り扱おうとする態度や習慣・技能」を身につけることが強調されていたことにも関連している。

これらの郷土教育運動の高まりの中で、知多半島の青年社会科教師であった杉崎章は、社会科教育の不振を打ち破る手段として、郷土の現実にじかに取り組み、生きた問題を発見する歴史学習を求め、郷土クラブの実践を手さぐりで探っていたのである。

私たちの学校では昭和二十四年のころから、郷土クラブをつくり郷土研究の活動をしてきた。もともと知多半島の私たちの地域には、知多郡史もあれば横須賀町誌もできている。それらが資料として真先に取り上げられたことはいうまでもないが、そのいずれもが数十年前の編纂であり、実証的・科学的な研究態度ですすむ歴史研究の立場からは、満足できないものであった。できあがっている書物にたよるもののない私たちは、自分たちの手で資料の検討をしなければならなかった。ここでおどろいたことは、郷土における文献資料である。古文書のほとんどすべてが江戸時代中期以降に限られ、中世までの

表１．1950年代前半における横須賀中学校「郷土クラブ」関連年表

1948年	民主主義科学者協会歴史部会が「国民的歴史学運動」を推進する。
1948年３月	杉崎が柳ヶ坪貝塚における土器片を採集する。
1950年	文化財保護法が制定され、文化財保護委員会が発足する。
1951年	『中学校学習指導要領』に「遺物や遺跡を見学・調査」が記述される。
1951年秋	杉崎が久永氏より柳ヶ坪貝塚採集の土器片の重要性について指摘を受ける。
1952年２月	杉崎が郷土教育全国連絡協議会第一回大会に参加する（千葉県成田市）。
1952年３月	杉崎が久永氏より柳ヶ坪貝塚の具体的な観察方法の示唆を受ける。
1952年５月	杉崎が文部省文化財保護委員会の了承を得て柳ヶ坪貝塚の予備調査を行う。
1952年６月	横須賀中学校郷土クラブが柳ヶ坪貝塚の学術調査を行う。
1952年暮れ	横須賀中学校郷土クラブ員の早川鉄也が社山古窯の報告を行う。
1953年４月	横須賀中学校郷土クラブが『柳ヶ坪貝塚』を発刊する。
1953年秋	横須賀中学校郷土クラブが高御前遺跡の予備調査を行う。
1954年３月	横須賀中学校郷土クラブが岩屋口古墳、社山古窯の調査に参加。
1954年７月	横須賀中学校郷土クラブが社山古窯址の第二次調査に参加する。
1954年	横須賀中学校郷土クラブが『社山古窯調査のあらまし』を発刊する。
1955年	日本民主党『うれうべき教科書の問題』を発行し、教科書批判を実施する。
1955年６月	横須賀中学校郷土クラブが社山古窯址の第三次調査に参加する。
1955年10月	横須賀中学校郷土クラブが獅子懸遺跡の調査に参加する。
1955年12月	横須賀中学校郷土クラブが野崎遺跡の調査に参加する
1956年３月	横須賀中学校郷土クラブが西屋敷貝塚の調査に参加する。
1956年３月	横須賀町史編纂委員会が『町史別冊　横須賀町の遺跡』を発刊する。
1956年５月	杉崎が「考古学と郷土教育　中学生の部」を発表する。
1956年11月	杉崎が「知多半島における古代漁村集落の土器」を発表する。
1958年	『中学校学習指導要領』が改訂され考古学的記述に制限が加えられる。

ぼりうるものは、室町期の鰐口一点にすぎず、鎌倉期以前は先史時代の続きといった有様であった。

こうした歴史の谷間をうめ、確かな資料にもとづいて郷土研究をすすめるには、原始時代や古代はもちろん中世にいたるまで、遺跡や遺物による考古学的方法に、よらねばならない分野が大きいことを知った（杉崎　一九五六ａ　二六八頁）。

三、柳ヶ坪貝塚の調査を通して

当時一般的には、遺跡・遺物への関心は、低かったといえる。例えば、「各地の遺跡が単なる中学生の土器標本の目的に供せられ、貴重なる資料が極めて軽率に扱われ、次々に破壊されて殲滅し尽くし、真に実証資料に役立たぬものとなったのが少なくなかった」という状況があった（池上年　一九五三　「跋」『柳ヶ坪貝

資料２　発掘現場も学校である
（杉崎　1970　13頁より）

塚』愛知県知多郡横須賀中学校）。

この柳ヶ坪貝塚[1]も、以前より雨が降ると付近が真っ白になる程で、すでに相当以前から知られてはいたが、特別に保存状態が悪く、終戦後しばらくの間は耕地として豆が作られ、遺跡の中心と思われる地点は牛馬のつなぎ場・瓦礫の捨て場になっていたという。

そうした折、弥生土器を象徴する櫛目模様の土器一片が拾われ、横須賀中学校郷土クラブ員が柳ヶ坪を訪ねると、遺跡が少し掘り返されており、三〇片程の弥生土器（柳ヶ坪式土器）が採集できたのであった。杉崎が豊橋で瓜郷遺跡を発掘調査中であった久永春男にその資料を見せたところ、弥生時代の古い形式であり、尾張地方ではこの時期の研究が立ち後れの状態であるといわれた。そこで、横須賀中学校郷土クラブは、多数の学術専門員の協力のもと、湿地に向かって作られた弥生式集落の立地状態などについて、具体的指導を受けながら、柳ヶ坪貝塚の発掘調査を計画、実施したのである[2]。

柳ヶ坪貝塚の調査の記録は、『柳ヶ坪貝塚』（一九五三愛知県知多郡横須賀中学校）として刊行、報告されている。生徒の作文については、「考古学と郷土教育」に掲載されており、これらの資料を手がかりに、調査の概要を次頁からの表2、3に示した。

表2　横須賀中学校郷土クラブ「柳ヶ坪貝塚　調査日誌」

五月一五日
数日前より、町助役で郷土史の一権威である、久野九兵衛氏の御ほんそうによって、地主・耕作者の承諾を得られ、町当局の副申もできて、文化財保護委員会に提出する書類は全く完備、地方事務所の桑山芳延氏に依頼して直ちに県教育委員会に発送。

五月三〇日
知多西地区警察長小柳録衛氏、中部日本新聞記者森義男氏来校、学校長と同道して杉崎現地へ案内する。

六月一日
県教育委員会主事高橋録太郎氏、現地視察のため来校。

六月七日（土）　晴
調査第一日、学術指導者の池上年氏は早朝より来校され遺跡の分布調査を開始、続いて久永春男氏、田中稔氏も参加、地元の久野九兵衛氏に何かと目に見えざる援助をうける。

中学校郷土クラブの生徒は午前中授業のため、午後発掘を開始した。
発掘に当り、先ず以て発掘区に選んだのは先般の予備調査に現れた竪穴の拡張である。あるいは住居址であるかも知れないのでそこへトレンチを入れた。それを第一トレンチとする。けれども、私たちがこの遺跡に期待するものはこの地域の最古の弥生式土器である長床式または貝田町式の遺物層であって、欠山式の竪穴によって決して満足するものではない。即ち長床式のベースを求めて、それに属する長床式土器を採集していた所の西方道路上に第二トレンチ、更に第一トレンチより南方の畑に向って第三トレンチ、発掘可能の条件において最大のトレンチを設定した。而して西よりA区、B区、C区とし、A区は池上氏、B区は田中氏、C区はその項勤務先よりかけつけてくれた加藤岩蔵氏の担当により作業を進める。
発掘作業と平行して中学校教官の早川宗雄氏・伊藤芳彦氏等の手により測量が進められた。
A区の上層では復元可能と考えられる中世の鍋・釜を見る。B区では人骨が散乱状態として出土。
早川氏・久永氏・伊藤氏は写真を撮影する。

本日の横中郷土クラブ員の参加、六〇名。作業を終って学校に帰り、調査員一同その資料を中心として検討討談を続ける。

六月八日（日）　曇後雨

第一日の好天気にひきかえ今日は雨だ。しかし雨で作業を中止しては全ての予定が苦しくなるので小雨をついて続行する。

本日の主眼点は第三トレンチの東端に近く発見された長床式のピットを北に拡張すると共に、昨夜の討議の中心となった三地区における層位の差の解明である。そのため、第二・第三両トレンチを結ぶと共に第一トレンチを南に延長して第三地区の接点を求めることである。

芳賀陽氏豊橋から応援に来る。一同、新鋭の参加に勇躍する。

池上氏は久野氏の案内により、周辺寺院の石塔調査にでかけ、加藤氏は勤務のため夕刻去る。

夜は横須賀町役場の一室にて有志の人の参集を得て懇談会を催す、総て久野九兵衛氏の配慮による。

六月九日（月）　曇後雨

期待していた昨日の日曜日がはっきりしない天候により作業の進捗は充分でない。今日は予定した最終日であるが一度崩れた空模様は晴れるかと見えたが又しても雨である。勿論、作業を強行して有終の美を求めんとする次第である。

前日より明らかになって来た長床式を包含する二つの層の資料を確実にするために努力した。即ち混貝土層の下の黒色有機砂層と黄褐色有機砂層のそれである。このため、第二日において接続した第二・第三両トレンチを南へ拡張する。

別の班は第三トレンチの東端を北に拡張していたのを更に第一トレンチの東に向けて延長するトレンチを作った。

ますますひどくなる雨の中を杉崎は久野氏の援助のもとに平板測量をやりとげる。

砂丘が水をふくんで軟弱となり、断面図の測図をする芳賀氏はずぶぬれになりながら、仕事を進めるがトレンチの壁は測図の進度に容赦なく、しきりに異様なひびきを立てて足元に崩れて、落砂に膝をとられるなど悲壮な状況を展開しながら―まず発掘作業の終止符を打った。

（杉崎　一九五三　七～九頁より）

表3　生徒による作文　「柳ヶ坪貝塚」の調査を通して

―貝塚の調査といっても、家でイモを掘る時のように掘っていけば、簡単にやれると思っていたが、掘っても掘っても砂である。その中にまじって土器がでる。先生は「砂の色の変化や、粒の大きさまで見抜いて下さい。」といわれた。

（石浜正一・中学三年）

―貝塚は砂畑であるので、地面がしめってくると砂崩れがある。砂がくずれては土器を層にわけれないので、仕事をやめることもできない。雨はますますひどくなって来た。僕たちは上へ上がってしまった。先生たちはずぶぬれになりながら仕事をつづけられ、層と層との間の図ができあがるころは足が半分もうまっていた。

（山下登・中学三年）

―日本史の時間に原始社会の勉強をしても、今まではよその国のことのように考えていたが、柳ヶ坪を調べてからは、僕らの祖先の生活だということがわかり、何度も土器の写真のでているページを見かえしている。本を開くたびにすぐ見る。

（久野寛・中学三年）

中村元彦は「貝を見るとニワトリを思い出す。」といった。学校からかえると、彼はニワトリの飼料に貝をとりにいくのが日課であった。この中村が道ばたで貝層を見つけると、反射的に走っていき、「土器があると年代がわかるのだが」といっているのには、私も顔負けの有様である。

（杉崎　一九五六ａ　前掲書　二七〇～二七一頁より）

この調査日誌からは、発掘調査の目的が、欠山式（東海地方西部の弥生時代後期後半の土器形式）より古い、長床式（三河地方における弥生中期後半の土器形式）や貝田町式（尾張地方における弥生時代中期中頃の土器形式）の遺物を求めたものであったことが推測される。弥生時代中期という歴史の谷間をうめる郷土資料を求めていたのであろう。確かに、この調査を通じて、「柳ヶ坪式土器」が尾張地方における弥生時代中期の指標土器として位置づけられたことは、特筆すべき出来事であった。しかし、とりわけ注目すべき事柄は、本報告書において多数の頁が割かれている歴史地理的な考察部分である。知多半島の弥生時代について、「寄道期をへて、それに次ぐ時期になると、阿久比谷のようなデルタ地帯や、各所に成長した海岸砂丘の後背湿地に水田農耕が普辺化されてきたものがあり、柳ヶ坪の土器をメルマークとして、半島一帯に篠島・日間賀島など、南方の海岸よりの文化をうけいれた文化圏が成立していたことを認めるのである」（杉崎　一九五三　三〇頁）と論述されている。こうした知多半島の歴史地理的な把握は、郷土クラブ員たちによっても共有されていたに違いない。

また、この調査における生徒の感想において特徴的であることは、学習したことが生活に根付いている点であり、発掘調査を通して郷土の歴史を学ぼうとする意欲に満ちあふれていることである。発掘調査を通して考古学的手法における「科学」の魅力を体感していたからだと考えられる。さらに、学習したことを生活に持ち込む姿は、杉崎が、遺跡や遺物の調査のねらいを、生活の姿勢の確立に求めていたところにその根拠を求められる。

教師や生徒が遺跡や遺物の調査をすすめていくその過程の中で、自然をつかみ社会を理解していく態度をうちたてたいと考えておるのであり、そこには遺跡を研究して歴史や考古学の専門家になるということは問題でなく、ただ郷土の共通経験の場にたって物をあつかう学問としての方法論にまなぶことから、主体的な生活の姿勢を確立していきたいと求めているのである。（杉崎他　一九五八　二二頁）

さらに、課外活動としての特色を生かし、クラブ員同士の人間的な統一や、事業を通しての総合的な生徒の発達を望んでいたことも、後の杉崎の発言から伝わってくる。

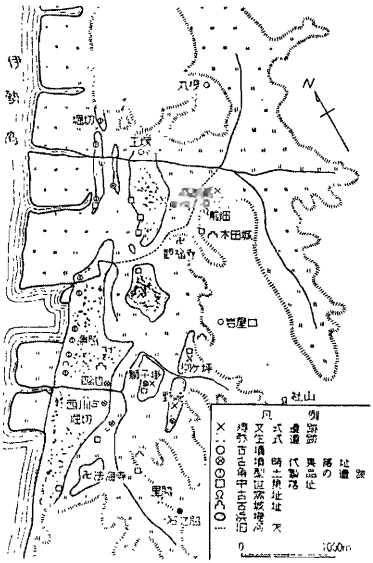
中学校におけるクラブ活動は、三年間の課程であるが構成員は毎年交代していくのが現実であり、累積される成果の処理とともに顧問教師の役割は、ＯＢもふくめたクラブ員の人間的な統一でもある。杉崎君はいう「発掘調査の事業は、計画から実施・整理そして報告の執筆・刊行と一連の総合芸術である」と、学問的な問題は別と

しても参加する人間の融和はもちろん周囲の人々の支持にもこまかい配慮が必要である。（愛知県知多郡横須賀町立横須賀中学校長・阪野弥生　一九六五　「序」白菊文化研究所『権現山古窯址』白菊文化研究所　第二集）

そして、発掘調査自体が、研究者との協働のもとで行われていた事実も大変興味深い。池上年は、愛知県在住の考古学協会会員であり、前述の久永春男は、愛知県蒲郡市在住の在野の考古学研究者であった。また、田中稔は、所属する職場において考古学サークルを結成し、研究を行っていた。こうした多数の研究者の協力のもとに行われた発掘調査が、地域住民の信頼を得て行われていたことは想像に難くない。

杉崎は言う、「私たちにとっては数片の弥生式土器をもととして、その時代の地形を復元し、祖先の生活を考察していくということは、始めての体験であり、学問とはこれなんだと科学の世界へすいこまれるような魅力を感じた」（杉崎　一九五六ａ　前掲書　二六九～二七〇）と。調査日誌や作文に現れた意欲に満ちあふれた生徒たちの姿の背景とは、発掘調査を通じて杉崎とともに、考古学の「科学」の魅力を体感し、共有していったためではなかろうか。

四、浜堤列の分布と石屋口古墳の調査を通して



資料３　浜堤の分布図
（杉崎　1950ａ　前掲書　269頁より）

柳ケ坪貝塚の学術調査を経て、郷土クラブの活動は、一時行き詰まった。

柳ケ坪の調査をおわり、翌昭和二十八年の活動は、すべて『柳ケ坪』の基礎の上に立って展開されてきたのであるが、遺跡の調査を通じて二千年前の祖先のくらしを話合い、浜堤列をあるいては当時の水田を問題にできるようになるには容易でなかった。土器を掘り出し、拓本をとることにより、文様の移り変りは理解できるが、なお私たちの心に満たされないものが残った。私たちの知りたいことは土器の歴史でなく、祖先の血のかよってい

る人間の生活である」（杉崎　一九五六ａ　前掲書、二七一頁）

生徒がもっとも理解に苦しんだのは中世の集落址であったという。当時は、須恵器と併出する「角型土製品」が、中世の「製塩土器」として認識されていなかったからである（近藤義郎　一九八四）。そのため、郷土クラブの生徒たちは、浜堤を歩いては中世の集落遺跡を求めて、浜堤列と遺跡の分布状況を地図に記入する活動を行っていった。こうした中、町史編纂委員会が発足して、郷土クラブの研究活動もそれに加わることになったのである。一九五四年三月から夏までに、浜堤列の分布と岩屋口古墳の調査を行っている。

横須賀中「郷土クラブ」における浜堤の分布と岩屋口古墳の調査活動については、報告書が未刊のため、杉崎の「考古学と郷土教育」の文章からその経緯を推測することとした。次頁からの表4、5は、杉崎の記述をもとに、調査の経過と生徒の作文を構成したものである。

これらの調査において注目すべき事柄は、生徒の共通の学習課題となった海岸線の移り変わりの問題である。では、なぜ海岸線の移動が共通の問題になったのか。それは、当時の横須賀町の地域社会の問題と重ね合っている。

当時の横須賀地域の問題としては、一九四四年、四五年

表4　横須賀中学校郷土クラブ「調査の経過」

柳ヶ坪の調査をおわり、翌二十八年度の活動は、すべて「柳ヶ坪」の基礎の上に立って展開されてきたのであるが、遺跡の調査を通じて二千年前の祖先のくらしを話合い、浜堤列をあるいては当時の水田を問題にできるようになるには容易でなかった。土器を掘り出し、拓本をとることにより、文様の移り変りは理解できるが、なお私たちの心に満たされないものが残った。私たちの知りたいことは土器の歴史でなく、祖先の血のかよっている人間の生活である。この点に対し一歩でも近づき、土器と浜堤を祖先の生活という形でむすんでいきたい目的をもって、四月最初のフィールドを観福寺の見晴台でもった。ここでは眼下に見渡せる低地を問題にして、「浜堤列はどうしてできたか。」「柳ヶ坪の時代はどこまで陸であったか。」「古墳時代・奈良時代の地形は。」「遺跡はどんな地形にあるか。」など多くの討議がなされた。

私たちの町では、祖先の生活が始ってから、歴史を通じて浜堤の上に生活がひろげられている点については認識を新たにさせられた。低地の生活は海岸線の移動と深い関係があるので、問題の最後は、最近の伊勢湾の地盤沈降の点にしぼられていき、いつも問題解決の共通の端緒は、柳ヶ坪の調査で知ったことであった。

教室にかえってからも、これらの問題は共通の課題となり、縮尺の大きな地図に、浜堤列と遺跡の分布状況を記入していくことにした。生徒は毎日、いくつかの組にわかれ、浜堤の上に遺跡をもとめてでていった。

こうして目と足で作り上げられた、集落分布図を見ると、弥生式中期の第一浜堤、同じく後期の第二浜堤、さらに土師器の第三浜堤と大きくわけられ、順次に形成されていく浜堤の年代を知った。さらにこの浜堤を部分的にとりあげて見ると、第三浜堤は南からのびてきたものであり、南へいく程、古くなって弥生式までも出土し、北の方では最後まで浜堤が形成されなかった地域も残り、そこは長く自然の良港となっていた。

生徒は二組にわかれて、知多半島の古式古墳をもとめて、上ノ町の甲山古墳と阿久比町の二子塚古墳を見にいった。甲山古墳へ行った者は、古式の古墳が山の頂上にある理由、岩屋口とはちがい古墳のいろいろな時代のものが、群をなしているわけなどを問題としてきた。二子塚古墳へいった組は、それが前方後円墳であるため、とりわけ印象が深く討議も熱心であった。前方後円墳が横須賀の地域にできずに、阿久比谷にできたわけについては、名古屋から横須賀を通り、阿久比へ抜ける現在の交通に強くとらわれる大人の考えにくらべ、生徒は無造作に大和から伊勢へきて海より阿久比へはいった文化であるとして、私たちの地域は名古屋と阿久比の両地域にとり残された地域で、文化的に僻地であるといった。

岩屋口の調査は、基盤の敷石近くで陶質窯器の山坏が炭とともに出てくるほどで、山坏の時代にもう荒らされたことが考えられ、遺物は刀子・鉄鏃・釘とともに、鐙・高坏・カメの須恵器が小さくわれて散乱しており、埋葬状態がわからないのが残念であったが、生徒の問題として、千貫をこえると考えられる巨石を何枚か使ってある石室がとりあげられた。

石材は硬砂岩であり、知多半島の丘陵には分布しない。土地の人は木曽川流域の産といっているが、木曽川は古墳の上の丘に立つと、伊勢湾の対岸に川口をひらいており、遺跡にもっとも近い産地として、一応うなずけるが、わからないのは運搬の方法であった。古墳時代に舟のあったことは、教科書にでてくる埴輪からもわかっているが、千貫余という巨石をのせる舟はあったかということである。「舟の中央にのせたら安定はよいだろうか。」「大きなイカダの両はしに、一つずつつんだら安定するだろう。」あるいは「二隻の舟の間に網でくくり、浮力を応用して海中をくぐらしてきたら」と珍案もかわされてきた。

（杉崎　一九五六ａ　前掲書　二七一～二七六頁より）

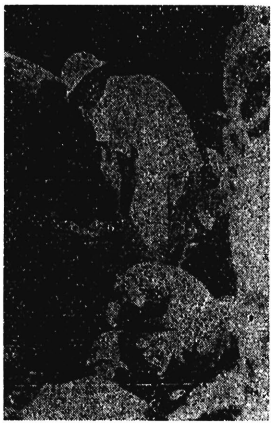
表5　生徒による作文　「浜堤列の分布」調査を通して

第二の砂丘ができ
第三の砂丘ができ
木曽川は海の向こうから砂を送り
鈴鹿おろしは砂を吹きあげて
浜はだんだん先へでた。
やがて、入り江はうまってしまい
真直ぐな海岸となった。

戦時中に防空壕を掘った時
家の下に貝層がみつけられた
サルボウにハマグリ、シオフキ
木曽川の砂の上に発展した町の歴史
今も地面の下から語られている。
（秋田昇・中学三年）

この指紋、この指のあと
力強い手のあとが残っている。
真剣に生きぬいた先祖たちが
千何百年前、この海岸で
沖をにらんで生きた海の生活―
（秋田昇・中学三年）

（杉崎　一九五六ａ　前掲書　二六七～二六八、二七二～二七三頁より）



資料４　石屋口古墳の調査状況
（杉崎　1956ａ　前掲書　274頁より）

と続いた震害により、海底の地盤沈下が起こったこと、一九五二年、現在の元浜の埋め立て工事が着工されたころ、その臨海部一体の井戸に、塩分が混入し「塩辛い」という声が起こり始めた問題、また、一九五三年に知多半島を襲った伊勢湾台風による堤防の決壊の被害などがあり、全て海岸線の分布状況に由来していた（横須賀町史編纂委員会編一九六九）。すなわち、横須賀町の住民にとっては、海岸線の移動に関わる問題は、生活する上での重要な課題となっており、そのために海岸線の歴史地理的な把握が必要であったのである。生徒たちは、そうした地域社会の問題意識を共有しつつ、遺跡の分布地図の作成や話し合いを行っていたのである。

半島部の小面積の地域であっても、平野にのぞんだ丘陵の突端には、岩屋口のように横穴式石室を一般的にもっているのに対し、海に向った漁村集落では組合せ式石棺といった形で、古墳があらわれてきて、近畿より直接、移入されてくる漁民文化の可搬性を想像させ、現在は石棺の発見地にのこされた遺物の確認と、集落址との関係をうらづける、角型土製品の層位的な調査をすすめている。（杉崎　一九五六ａ　前掲書　二七六頁）

このような郷土の歴史についての把握の仕方は、杉崎自身が、歴史地理学を学んだことによるところが大きい。[3] そしてそれは、「こうした具体的な基礎をもって、地域をさらに綿密に踏査することによって、私たちは新しい遺跡を見いだし、あるいはきき出してきた。かくれていた村の姿が、新たに地理学や地学の学問が加わることにより、ますます明らかになってきたのである」（杉崎　一九五六ａ　前掲書　二七四頁）というように、専門諸科学との連携による成果であった。この実践の評価については、考古学者・和島誠一が行っている。

中学校の郷土クラブが中心となって、一つの地域の遺跡を系統的に取扱い、発掘も行った杉崎氏の実践例では、単に弥生式土器の一形式の内容や古墳や窯址の構造が明らかにされたというだけでなく、例えば浜堤列と集落の問題に切り込んで、「貝塚でない遺跡からは、海岸線の異動を簡単に考えることはできない」と安易な常識論を越える結果に達している。古墳群と集落との関係も系統的に分布調査されたので、壊された横穴式石室を清掃してその石材の問題を取り上げても、組合せ式石棺が角型土製品を出す海浜の集落址に伴う事実を指摘しても、それが地域性の問題として正しく提起されるのである。

（和島　一九五六　「考古学と郷土教育　あとがき」）

この和島の指摘のように、横須賀中学校「郷土クラブ」の生徒たちは、浜堤の分布と岩屋口古墳の調査を通じて、

海岸線の移動を具体的に把握し、また海を隔てた文化の交流の様子についても多様に認識していたといえる。

五、社山古窯址の調査を通して

次に、郷土クラブは、町史編纂事業の一環として、一九五四～五五年の間に計三回、社山古窯址の調査を行った。調査に至るまでの経緯は、郷土クラブ員で当時中学二年生であった早川鉄也の報告に基づいている（表6）。この発掘調査自体、中世古窯址が発掘調査の対象として認識されることが少なかった頃における学問的にも貴重な実践であったといえる。

資料5　鬼瓦をいだいて
（杉崎　1956ｂ　前掲書　10頁より）

知多半島の丘陵には、古陶器の窯が各所に群がっており、その数は二〇〇〇基を超すといわれている。その中でも瓦の窯は、瓦の文様、形態から、その年代を明らかにすることができるので、古窯址の調査は注目を集めた。この調査は、『社

表6　社山古窯址調査の経緯を綴った生徒の作文

―終戦後の食糧難のころに、山の奥にひらかれた畑へいく道を作る時、幸か不幸か、一部が古窯にかかったらしく、道の下に瓦の破片が散っている。後になって僕は、ここを掘ってみたが窯らしきものはなかった。でもこんなにたくさんの瓦を見つけながら、問題にもしなかったころのことが残念でたまらない。そうした有様であった社山の古窯に、私がどうして関心をもってきたか、その動機は例の柳ヶ坪貝塚の調査である。地下に埋まっていて、今まで目もくれなかった土器の破片が、郷土の歴史をとくのに、そのカギとなることを知った。私の家でも、たまたまその話がもちあがり、瓦のかけらなら家の裏山にもあるという話がでた。もしやと思った私は、一応そのあたりを調べてみたが、雑草におおわれた山の中で、何もつかむことはできなかった。けれどもその後のクラブの話では、どうしてもだまっておれなかった。友だちの久野寛君や春田修生君に協力をもとめ、再調査の結果、数個の瓦を発見しクラブへ報告した―
（早川鉄也・卒業生）

―瓦の破片は早川君の家の裏山一帯に散っていた。早川君に地名をきいて、社山古窯址と名づけることにきめた。土地の人は古窯からでてくる山坏や鉢などのことを、藤四郎焼きといっているので、先生もお百姓さんにあうと藤四郎はありませんか、といってきいてみた。この日の反省として一番強く話し合ったのは、遺跡の保存の問題である。早川君のお母さんも、以前はもっとたくさんあったといわれた。谷一つ東の丘陵にも多くの古窯が分布しているのを知り、日を改めてまたでかけたが、この丘陵は砂防・植林の工事中で、大部分がこわされていた。今なら分布の様子はわかるが、一日おくれればそれだけ、遺跡が失われていく。
（秋田昇・中学三年）

（杉崎　一九五六ａ　前掲書　二七六～二七七頁より）

表7　横須賀中学校郷土クラブ「社山古窯址　調査日誌」

第一次調査（昭和二九年）

三月一五日　晴

中学校の方へきていただいた久永先生・役場の久田さんとともに社山へ到着したのはもう十時をすぎていた。現地にはすでに役場の岡戸さんをはじめ町史の委員の方々、常滑古窯調査会・報道機関・その他の研究者があつまってみえて、山は大にぎわいである。楢崎先生・田中先生も相ついで到着され、早速活動を開始した。

まず全体の資料を数量的につかんでいきたいと考え、周辺の草刈りをする班と併行して、表面にちっている瓦や山坏などの遺物を種類別に採集する仕事にとりかかった。林道にかかっている地点と二地点の破壊坑よりの観察から、一応三基からできている古窯群と仮定し、西の方からA・B・Cの窯と名付けることにした。調査はそれらのうち、もっとも破壊のはげしいAの窯・Bの窯の二基を予定し、Cの窯は遺跡として保存することにした。

午後になり、楢崎先生の指導により卒業生の早川鉄也、生徒では大森・森岡が手つだってトランシットでの地形測量をはじめるとともに、まずAの窯から発掘にとりかかった。――破壊されている所から斜面にそってトレンチを掘り、窯にあたったらそれをひろげていこうとする作戦である。少し掘っていくと層のかわっている所へ達した。それは昔の地肌で笹の葉のくさったのがたくさんみられた。これからが本物だと意気ごんでかかったが、何度、目をみはらしても思うような瓦はでてこない。（高橋良祐）――でも破壊坑からみるともうすぐ遺層である。明日からは遺物層をおって横にひろげることにする。指導にきていただいた三人の先生の宿舎には、加木屋小学校の一室を借用する。

三月二六日　晴

測量係は今日も楢崎先生の指導で地形測量をつづける。発掘の方は第一日にひきつづいて、Aの窯の床面をあきらかにしていくこととして、A区で窯のあり方が大体了解できたので、予定したBの窯の調査をはじめることであった。

――Aの窯では山杯がほとんどであり、瓦は丸瓦が少しでた程度であった。それでも一番上の方から巴文の軒丸瓦がでた時は、皆が歓声をあげてみにいった。でてくる状態を写真にとるので、移植ゴテをうごかす竹内君も真剣である。僕は鬼瓦の鼻を掘りだした。普通の瓦にしては変であるので、先生にみせたら鼻の穴だと大わらいされた。そういえば下に歯がある。（伊藤高光）――今日からはじめたBの窯では、下村時・下村啓・永島・永井・及川ら八人して分担したが、―私たちの班は八人で、窯の上の方に四人、中間に二人、下に二人である。上のものが掘りかえした土を下へながすと、下の方では遺物をみながら道の下段へほうりこむのだが、両の窯に一日おくれているので表土の土取りも大変である。A区からはめずらしいものがでるらしく、歓声が聞こえるがこちらは意気があがらない。それでもやがて遺物層となり、窯のたき口近くでは炭がみつけられ、中央よりは軒平瓦のほとんど完全なのがでてきた。文様は唐草であるが菊の葉のようである。（下村時康）最初の遺物層がなくなると、赤く焼けた層があり、その下にまた新しい遺物層があらわれた。この日もおわり近くなってから、窯の中央で平瓦がかさなりあって姿をあらわしてきた。どれもが文様のないものばかりであるが、すこしもかけていない完全な平瓦である。つづいて三枚また二枚とでてくる。平瓦と平瓦の間には小さい平瓦の破片がはさんである。先生方は天然色写真の準備をしてみえる。

（永島朋泰）――

発掘は毎日できるだけ早くきりあげて、その日その日の検討をしているのだが、今日の討議は問題が多かった。養父で瓦の製造をしてみえる早川益一郎氏は前に遺跡の下の谷で、瓦をつくる粘土をとったことがあるといわれ、この土地の粘土は比較的に高熱に対して弱い質である点や、粘土にもそれぞれ個性があり、それが長所とも短所ともなっておって、現代の瓦を焼く時には、あらゆる気候の変化にもたえられるように、各種の粘土を配合していることなど、その職業の方でなければわからない苦心を説明して下さった。さらに榊原隆近氏は前に採集してみえる資料の中から杏葉唐草の軒平瓦を持参していただいた。

三月二七日　晴

第三日である。昨日発掘をみにこられた久野九兵衛・加古新平両氏の案内により先生方は谷のむこうの古窯群の視察にでかけられる。むこうの論田古窯でも社山古窯と同じ文様の瓦を採集でき、窯の構造・遺物の相異などについても、これからの研究をすすめる上に参考になる資料をうることができた。中学の早川巌先生がみえてさかんに天然色の写真をとってみえる。――むこうの山からかえってみえた先生は、まっ先きに僕にむかって「君が昨日こなかったから、仕事がはかどらなかったよ」といわれた。やはり力仕事は僕でないとできないらしい。

青空は雲一つなく、澄みきった春の空
郷土の知識、僕はまだ何もしらない。
澄みきった頭に、社山で
うんと、知識をつめこんでかえろう。

午後は中央より少し下で、何かコツというので、苦心して全体の姿をあらわすと蓮花文の軒丸瓦である。（下山敬三）――A区ではほぼ中央の線で断面をつくり、西半分は端まで調整した。長さは約13メートル、中央はややふくらみをもち上下両端はしぼられていて窯の規模の全体がわかってきた。B区では前日の平瓦の出土状況を明らかにしていったが、林道とのさかい目から合わせれば完全になる巴文の軒丸瓦が四つにわれてでてきた。A区の巴文と巻き方が反対である。

午後は先生方が床面の実測図をつくってみえるので、私たちは出土遺物の集計をおこなった。表面採集・A区・B区と地区別にわけて、さらにそれらを種類別にしていくのである。丸瓦は筒先・山坏と山皿は底部でかぞえたが、平瓦は外角四個で一個体にする必要があった。町役場での議会にでてみえた町長高津元治氏と町会議長阿知波安兵衛氏が町史編纂委員岡戸さんの案内で視察にこられた。

三月二八日　曇り

最初は三日で調査をおわる予定であったが、しらべていくと新しい問題がつぎつぎとうまれてきた。そこでもう一度計画をたてなおして、再調査をすることにして、遺跡はしばらく仮保存の手配をした。発掘の成果が大きく報道されているので、遺跡の安全が心配である。

心ない人によって遺跡が掘られねばよいが、残された窯・残した壁…私たちの研究にとってはかけがえのない資料である。

第二次調査（昭和二九年）

七月二六日　晴

今度の調査の目的は、Bの窯を上端まで掘りのぼり、その全体をとらえることとして、もう一つはA・B両方の窯の相互関係をしらべることである。

朝から炎天をおして仕事をすすめる。待つ程もなく楢崎先生ついで久永先生も到着されて作業は本格的となってきた。B区の方では前の調査の床面の下に、さらに一層の遺物層があり、そこから大きな鬼瓦があらわれ、一同歓声をあげてよろこび作業も小休止の状態である。前の調査の時にでている脚部片とうまく接合してほとんど完全となった。

一方のA区では東に残した断面の測図をとるために、田中先生とともに壁面を清掃していたが、上端をさらに追求することにより煙出しを確認した。窯がちぢんできた上端に焼台を二個すえてくぎり、煙道はその間をのぼりつめて、いよいよ地上へでる部分は粘度で固めてあった。

第一次調査の時に、宿舎として提供をうけた加木屋小学校は新築工事中のために、今度の調査にあたっては宿舎として町長高津元治氏宅の好意をうけることになった。

七月二七日　晴

第一日につづいてA区東壁の断面測量をとりながらB地区の調査をおしすすめたわけである。Aの窯でもそうであったが、とくにB窯では下部に炭が多く、燃焼室と思われる所からはじまった傾斜のゆるい部分と、そこから急角度をなしてのぼっていき煙道におよぶ部分の二つにわけることができるが、遺物は両方のほとんど限界までできて、それら全体が焼成場としてつかわれていたようである。注意して観察してみたが、傾斜のかわる附近に施設としてみとめるようなものは何もなかった。

A区の測図がすんだので、一方でB区西壁の測図をとるとともに、主力は両方の地区の間に残してあった隔壁を、A区の方から切断してトレ

ンチをいれた。横断面からA・B両方の窯の相互関係をみようとしたのであり、遺物の包含層はだいたい三層にわかれており、最上部の遺物層よりは一本の角をもつ鬼瓦が出土した。

正午すぎ、遠く東三河の北設楽郡より夏目一平・岡田松三郎の両氏が視察にこられる。

七月二八日　晴

中央の隔壁を切り通して、A・B両区をつなぐトレンチの仕事を継続した。

断面の最下部で、A・B両方の窯が約五十糎の間隔をもって床面がくぼんでおり、二つの窯の区別が明らかとなった。そこでB・C両窯の境界、A・B両窯の床幅をしるために、断面の下をさらに左右へ延長してA・B両区の地山にいたるまで掘りさげてみた。この観察により、東端のCの窯が未調査であるが、発掘の当初に三基の窯が併列しているということを、仮りに考えたのが妥当であったことが裏付けられた。

しかもなお、中央隔壁の断面を注意深く観察すると、二度目・三度目の焼成を示す遺物包含層に問題を残しているのをしった。A・B両窯の床がそれらの層序ではたがいに切り合っている点であり、これでは同時の焼成は不可能と考えざるを得ない。この問題についての解明は、この遺跡の調査の焦点の一つでもあり、さらに隔壁を横位に数個所切り通して断面を精密に観察する必要をみとめた。

予定した期日もきており、残っている中央残壁には松の木が数本あるので、仕事の能率も意のごとくすすまず、三度の計画を期して下山することにした。

第三次調査（昭和三〇年）

六月二五日　晴

昨秋以来、第三次調査について何度か計画をもち、資源科学研究所の和島誠一氏には東京からわざわざ足を運んでいただいたりもしたが、そのたびに時期にめぐまれず、結局最終調査は春すぎて六月になっ（ママ）しまった。

今度の仕事は二回の調査に残してある隔壁の取りこわしである。この作業を通じて窯と窯との相互関係の確認と、層位別採集による遺物の変化の検討という二点を課題として期待したのである。

土曜日の午後、学校を出発し現地に到着、とりあえず松の木を切っている間に久永・楢崎・立松・新美・白井の各先生も集っていただいた。しっかりと根をはった株をとりはずすことは仲々の辛苦な仕事である。

窯と窯の相互関係によりよい考察をもつために、A・B両区をつないだ横断トレンチの上と下で、さらにそれぞれ一地点をえらび、断面を観察することにした。すなわち上部の断面では前回の横断面より三十糎程けずりおろし、下部では林道より約一メートルのぼったところで切り通した。

今日は何とか晴れてくれたが、梅雨の候であるので明日の天気を念じながら下山する。

六月二六日　曇

現地にはすでに田中・加藤の両先生も到着していて下さって、仕事は急ピッチにすすみだした。

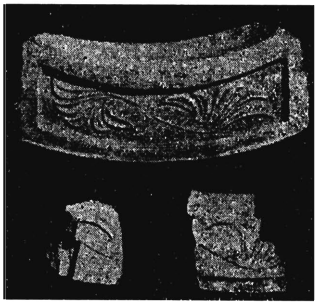
いずれの層位からも、瓦とともに山杯・山皿が併出しており、同一時間に両方ともが焼かれたことを示しているが、各層位の間に遺物の変化はみられず、これらがごく短期間のうちに大量生産されたものと考えられる理由である。

上部の断面を観察しながら、最上部の表土をはいでいくと、二次調査の時にA窯の煙出しを確認したときから、いわゆる煙出しのあり方に注目していたことでもあり、昨日も横断面のところどころに黒い炭化物の多い間層がはいっているのに留意していた点であったが、その間層を追っていくと細長い管状になっており煙出しの遺構が姿をあらわしてきた。わずか二メートルの幅にすぎない隔壁の間に八基の煙出しを確認することができた。煙出しの構造はきわめて多岐であり、粘度で固めてあるもの、焼台の凹部を利用しているもの、山杯・山皿の丸みを応用したもの、一基毎に同じものはなく変化にとんだ趣向である。

中央より下の部分からは、数多くの資料を得ることができたが、従来一片も採集していない種類の唐草文軒平瓦をとりだした時には一同が歓

声をあげた。今まで軒平瓦で一種でるはずでてこなくて何かわりきれない気がしていたが、これで不満も吹きとんだ。
夕やみせまるころ予定を完了し遺跡とわかれる。一年半の思いでの遺跡、社山をふりかえりながら山を下った。
（杉崎　一九五六ｂ　前掲書　一〇～一三頁より）

資料６　社山古窯址出土の瓦
（杉崎　1956ａ　前掲書　276頁より）



資料６　銀杏瓦
（上、観福寺寺院址出土　下、社山古窯址出土　三ツ池古窯址出土　杉崎　1956ａ　前掲書　78頁より）

表８　生徒による作文　「社山古窯址」の調査を通して

社山へ行って
―今日は先生が向うの谷を視察に行かれたので、自主的に仕事にかかった。中学の早川先生がみえて、盛んに天然色の写真をとってみえる。久永先生は真先きに、僕に向って君が昨日こなかったから、仕事が仲々はかどらなかったよ、といわれた。矢張り力仕事は僕でないとできないらしい。
青空は雲一つなく澄みきった春の空
郷土の知識、僕はまだ何一つ知らない。
澄みきった頭に、社山で
うんと、知識をつめこんでかえろう。
午後は中央より少し下で、何かコツというので、ていねいに全体の姿をあらわすと、蓮花文の軒丸瓦である。先生は、ＯＫ・ＯＫの連発である。
（下山敬三・中学三年）

社山のかまあと
山の中腹にある、社山のかまあと
先生もぼく等も目をサラにして
鍬やスコップを動かす
発掘がすむと、討議がはじまる。
一日の汗をふきながらみんなが考える
一体、瓦の布目はどうしてだろう
山茶わんは何枚くらいつまれているか
茶わんの間に何がこめてあるのか
もっと考えて掘ろう
布目の上にクスリが流れているから
焼く前の
粘土のやわらかいうちだと考えるが
明日はもっと観察しよう
（永島朋泰・中学二年）

（杉崎　一九五六ａ　前掲書　二七八～二八〇頁より）

山古窯調査のあらまし』（一九五四年　愛知県知多郡横須賀中学校）として、報告書が刊行されている（岡戸栄吉編『横須賀町史別冊　横須賀の遺跡』（一九五六　横須賀町史編纂委員会　に再録）。調査日誌、生徒の作文は、表7、8に示した。

この社山古窯址の調査において特徴的であることは、生徒によって調査の計画が推進・実行されたことである。地域の問題として提起された遺跡保存の問題をとらえ、遺跡の破壊を食い止めるべく発掘調査を計画、実行したのである。つまり、この調査は、地域社会における開発の問題と、歴史学習の内容が密接な関わりをもった実践例として認めることができる。生徒と住民が問題意識を共有し、研究者との協働を通して、現在進行形としての地域の課題の解決をめざしたのである。調査にも加わった和島誠一は、次のように述べている。

社山古窯址で近くの寺址の銀杏唐草の瓦が発見されたことも、東大寺瓦を渥美半島で焼くような古代的な形態に対して、中世的な生産形態を示すものとして正しくとらえられている。これらの仕事は専門学者と正しく結びついてすすめられたのであるが、新しい発見と事実の生き生きとした把握が生徒によってなされていることと、郷土の歴史を明らかにする遺跡を大切にする気持が強く出ていることは特徴的である。日本の文化財を守るものは一片の法令ではなく、まさに彼らであろう。

（和島　一九五六　「考古学と郷土教育　あとがき」）

また、生徒たちが、社山窯址より出土した鬼瓦や唐草文の軒平瓦に関心を抱いているところが興味深い。後の調査においては、社山古窯の生産主体や瓦の供給先が判明している。それは、生産の主体が、荘園領主としての熱田神宮であり、瓦の供給先として古窯に近い東海字観福寺で一部が使われているほか、熱田神宮寺で多く使用されていたことなどが分かった。さらに、同范の瓦は遠く京都の安楽寿院へ送られており、鳥羽離宮の調査でも、出土していることが判明した（杉崎章　一九七三　三三九頁）。鬼瓦や唐草文から分かる文化の交流の様子である。こうした生徒たちの関心は、郷土の文化財を探究しようとした姿勢に基づいており、地域の文化について考察を深めた様子が伝わってくる。遺跡や文化財をテーマとし、その保存と活用を考えようとする問題意識は、現在においてもなお通じるものがあると思われる。

六、横須賀中学校「郷土クラブ」の実践の意義

一九五〇年代前半における横須賀中学校「郷土クラブ」

の実践とは、いかなる活動であったのだろうか。それは、大まかに結論づけるならば、発掘調査の体験を通して、生徒による主体的な歴史の解釈と現代社会の問題の解決を目指した、社会科歴史学習として位置付けてよいものであった。[4] 杉崎は、社会科教育について以下のように述べている。

私たちの社会科教育を生活綴方の方法で鍛えあげたものが、子どもの目をのばす教育方法ではなかろうか。自分の目でものを見て、自分の頭でものを考える子どもを育てる教育こそ新しい社会科教育ではないか。（杉崎 一九七〇　二頁）

当時の社会科歴史教育は、手探りの状況ですすめられており、杉崎は、こうした郷土クラブの実践を通じて、遺跡調査の教育的価値を見出そうとしていたのであった。また、教育活動の中での遺跡調査の目的として、「歴史・地理・道徳についての既成の概念くだきと、創造的な人間の再生」に理論的な根拠を求め、考古学的手法に、歴史学習の方法的な根拠を求めた。[5] では、なぜ、歴史学習におけるクラブ活動の役割を重視したのか。杉崎は、クラブ活動と教科指導との関連性について次のように述べている。

教師として、もっとも心をくばっているのは、教育と研究の統一の問題である。研究が実証的・科学的にすすめられていくかぎり、それがどの立場からの仕事であっても、研究自体としては意義あるものとされる。けれども、私たちが、教育としてとりあげるには、それでよいだろうか。生徒とともに遺跡の調査をはじめて、だんだん日数が重なり、ようやく生徒の顔に疲れが見えてくる時、「生徒は何をつかんで帰ったろうか。」「調査の意義をしり、労働の価値に満足していったろうか。」さらに研究が、クラブ活動の限界をこえ、教科の学習活動の中にどう関連づけていくか、これから高御前遺跡を調べ、つづいて、近世の石塔婆の調査に立向うに当り、理論の上でも一層きたえて、多くの反省をおこなっている。

（杉崎　一九五六ａ　前掲書　二八一～二八二頁）

つまり、横須賀中学校「郷土クラブ」が行っていたのは、考古学的手法を用いた郷土の歴史研究であり、教育活動としての歴史学習であったといえる。杉崎は、教科との関連を徹底したクラブ活動の実践を持ち込むことによって、教科の授業に生かそうとしていたのである。[6]

文部省の考える指導要領の方針が、いつもその目標に実践的な学習を尊重するような表現をしているにもかかわらず、実際高等学校においてはもちろん、これまで毎週の時間編成を担任教師に任せられていた小学校においても、一次限を新指導要領では四十五分と限定し、実践的な単元学習を困難としてきている現実の情勢において

はますますこの感を深くするのである。そしてこの問題については、学習内容をどちらに配分するかではなく、クラブ活動における徹底した実践の成果を、どんな形で教科指導の場へもちこんでくるかということで解決されるべきではなかろうか。（杉崎他　一九五八　二四頁）

当時は、子ども自身による自治的なクラブ活動の運営が、すすんで行われていた時代でもあった。東京都の小学校教員であった石橋勝治や金沢嘉市は、クラブ活動が、子どもの自主性を伸ばすとして、積極的な運営を行っていた（石橋　一九四八、金沢他　一九四八）。こうした状況の中、横須賀中学校「郷土クラブ」は、教育課程の融通のきくクラブ活動の時間を利用して、生徒の自主性を大切にした歴史研究と歴史学習の協働の道を模索していたのである。

私たちの研究は中学校のクラブ活動としてはじまり、クラブ員は三年間で卒業していくが、累積された成果はクラブの業績として誇り高くうけつがれている。専門の学者であっても、短年月の間にはできかねる課題を少しずつなしとげ、学問の領域に研究の素材を提供してきたのであった。（杉崎　一九七〇　二九頁）

横須賀中学校「郷土クラブ」の実践は、中学校における社会科歴史教育の一つのあり方を示しているのではないだろうか。

おわりに

かつて知多半島には、横須賀中学校「郷土クラブ」の実践以来、遺跡保存のために調査面積を限定して、発掘調査を行う学術調査の伝統があったという。しかし、現在においては、地域の自然への感謝を忘れた環境破壊が進み、埋め立て工事や道路建設等によって、次々と遺跡が破壊されている。私たちは、横須賀中学校「郷土クラブ」の実践の何を継承し、発展させていけばよいというのか。[7] 発掘調査が学術的な目的だけでなく、そのほとんどが開発に先立つ事前調査によるものとしてなされている今、こうした問題を真摯に考える必要に迫られているようにも思う。

千葉県の県立高校の教員であった宮原武夫は、歴史教育と地域の文化財の問題に対して、「歴史教育者の研究と考古学者・歴史学者の研究との間に問題意識や研究方法のうえで大きなへだたりがある」（宮原　一九七四　二〇四頁）と述べた。そうしたとき、愛知県横須賀中学校「郷土クラブ」の実践における歴史研究と歴史学習の協働のあり方に、私たちが学ぶことは大きい。改めて、何のための歴史研究か、何のための歴史教育かを、教師とともに、研究者が見つめ直す必要性に迫られているように思う。

《注》

（1）「柳ヶ坪貝塚」という呼称は、後の調査の結果、遺跡の性格が貝塚のみに限定されないことから、「柳が坪遺跡」と改められ、「柳ヶ坪式土器」自体の性格も疑われつつあるが（宮腰　二〇〇三、早野　二〇〇五）、本発表においては調査日誌の原文に従って「柳ヶ坪貝塚」と記す。

（2）蒲郡市三谷町出身で在野の考古学研究者であった久永春男は、瓜郷遺跡の発掘調査を通して、「発掘現場は学校であり出土遺物も教材である」という、見学者や小学生、教師を含めての研究を実践しており（久永春男先生頌寿記念論集刊行会編　一九九八）、杉崎は、従来とは異なる学者のタイプを発見するとともに、発掘現場におけるこうした研究者の姿勢に共感していったと思われる。

（3）杉崎は、一九五三年に愛知県教育委員会からの派遣で名古屋大学文学部に内地留学し、地理学者・井関弘太郎氏の委託研究生となっている。杉崎は、『大昔の人々の生活：瓜郷遺跡の発掘』（和島　一九五三）の中の、井関執筆「かくれた谷」の一節に感銘を受けたと回顧している。

（4）森分孝治は、社会的教科教育としての歴史教育の意義について、一、起源と来歴を知ることによる現代社会の理解　二、過去の社会の理解を通しての現代社会の理解の二点をあげ、「子ども自身が自己の価値観、生き方をもとに事象を解釈し、事象の解釈を通して自分なりの思想を形成でいるように構成組織されなければならない」と述べている（森分　二〇〇〇）。こうした文脈においても、生徒の自主的な歴史解釈を促した横須賀中学校「郷土クラブ」の社会科歴史学習としての位置づけを確認することができる。

（5）二〇〇八年三月に告示された新中学校学習指導要領［社会］においては、「探求」型の歴史学習が強調され、生徒による主体的な歴史解釈を目指した学習も提唱された（土屋　二〇〇八）。こうした意味においても、考古学的手法を歴史学習に取り入れることについての有効性を認めることができる。考古学的手法を活用した歴史授業の実践については、別の機会に論述したい。

（6）杉崎は、「郷土クラブ」の運営に関して次のような反省を行っている。

私たちのクラブは、多くの卒業生を社会へおくりながら、いろいろと活動をつづけてきたが、組織がクラブ活動であるため、年々仲間の交代からくる障害は、局部的な交流ですみ、だんだんつみあげられ

ていく研究の成果」とのうけつぎは、比較的たやすくひきつがれていった。クラブのこうした面は一方で、年毎の運営が前年度のくり返しでは間にあわず、指導の創造性が強くもとめられるもとにもなっている。構成する人間と累積する成果の問題は、毎日のおたがいの間においてもあてはまることであり、いくつかの組にわかれて活動する時、それぞれの活動がクラブ全体として、むすばれていないということは、相互のまとまりという点で、生徒の意欲をさまたげてきた。こうした活動の抵抗を調整するために、全体の歴史を通じて、郷土の発展を「知多半島の石器時代」「農業のはじまり」「古墳群の分布」「丘の上の古窯」「荒尾谷の支配者」など、十余の研究テーマを設けて、それぞれやっているすべての研究は、どれかのテーマの中に位置づけしていった。この場合、縄文式の高御前遺跡、弥生式の柳ヶ坪遺跡、岩屋口古墳、さらに社山古窯の各調査は、おのおのテーマの中心となってつづいている。

これらの横須賀中学校「郷土クラブ」の研究成果が、具体的にどのようにして社会科授業に取り入れられていたかについては、今後の分析課題である。

(7) 筆者は、愛知県内の小中学校に九年間勤務の後、財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター、愛知県埋蔵文化財調査センターへの勤務を通して、発掘調査や考古学研究、文化財の普及啓発活動に携わる機会を得た。本稿は、筆者のそうした個人的な経験に基づく問題関心から執筆した経緯があるが、今もなお、横須賀中学校「郷土クラブ」の実践が、歴史研究と歴史学習の協働のあり方に対して何らかの示唆を与える視座を保持していると考える。何より、本実践の根底に流れる歴史的精神ともいうべきものが、乱立する遺跡の破壊といった現代史的な状況のもと、継承されていくことを願う。

《参考文献》

杉崎章　一九五三　『柳ヶ坪貝塚』愛知県知多郡横須賀中学校

杉崎章　一九五六ａ　「考古学と郷土教育　中学校の部」和島誠一編『日本考古学講座　第一巻　考古学研究法』河出書房

杉崎章　一九五六ｂ　「社山古窯」　岡戸栄吉編『横須賀町史別冊　横須賀の遺跡』横須賀町史編纂委員会

杉崎章　一九五六ｃ　「知多半島における古代漁村集落の土器」　古代学研究会『古代学研究』一五・一六合併号

杉崎章他　一九五八　「『考古学と郷土教育』懇談」　杉崎章編『野帳』第二期第三冊　瓜郷遺跡調査会
杉崎章　一九六〇　「知多半島における先史時代の地形」愛知学芸大学歴史学会『歴史研究』第七号
杉崎章　一九六二　「東海地方における古代海浜集落の文化」愛知学芸大学歴史学会『歴史研究』第一〇号
杉崎章　一九六九　「原始・古代・中世」　横須賀町史編集委員会編『横須賀町史』横須賀町
杉崎章　一九七〇　『常滑の窯』学生社
杉崎章他　一九七一　『柳が坪遺跡』東海市教育委員会
杉崎章　一九七三　「知多古窯製品の流通販路と用途」徳川林政史研究所『徳川林政史研究所　研究紀要　昭和四八年度』財団法人　徳川黎明会
杉崎先生退官記念会編　一九八三　『原山教育への道』杉崎章
知多古文化研究会編　一九八四　『知多古文化研究一　―杉崎章先生退官記念論文集』知多古文化研究会
知多古文化研究会編　一九九六　『知多古文化研究一〇―杉崎章先生追悼論文集』知多古文化研究会
岡戸栄吉編　一九五六　『横須賀町史別冊　横須賀の遺跡』横須賀町史編纂委員会
八幡町史編纂会編　一九五六　『八幡町史資料　第二集　八幡のむらのおいたち』愛知県知多郡知多町
豊橋市教育委員会　一九六三　『瓜郷』豊橋市教育委員会
白菊文化研究所編　一九六五　『権現山古窯址』白菊古文化学報　第二集
横須賀町史編集委員会編　一九六九　『横須賀町史』横須賀町長　白羽清一
立松彰他　一九九〇　『東海市史　通史編』東海市
山下勝年　一九九五　「敷波の寄せる半島一」知多古文化研究会編『知多古文化研究九』知多古文化研究会
宮腰健司　二〇〇三　「柳ヶ坪遺跡」愛知県史編さん委員会編　『愛知県史　資料編二　考古二　弥生』愛知県
早野浩二　二〇〇五　「柳ヶ坪遺跡」愛知県史編さん委員会編　『愛知県史　資料編三　考古三　古墳』愛知県
石橋勝治　一九四八　『子ども自治会の指導』社会書房
金沢嘉市他　一九四八　「(座談会)子どもクラブの問題」『あかるい教育』一〇月号
相川日出雄　一九五二　「私の歩んだ歴史教育の道」『歴史評論』三五号　一九五二年四月
相川日出雄　一九五四　『新しい地歴教育』国土社
相川日出雄　一九五六　「考古学と郷土教育　小学校の部」和島誠一編『日本考古学講座　第一巻　考古学研究法』河出書房

石母田正　一九五二　『歴史と民族の発見　歴史学の課題と方法』東京大学出版会
和島誠一　一九五三　『大昔の人の生活：瓜郷遺跡の発掘』岩波書店
和島誠一編　一九五六　『日本考古学講座　第一巻　考古学研究法』河出書房
近藤義郎　一九八四　『土器製塩の研究』青木書店
西川宏　一九八六　「学校教育と考古学」『岩波講座　日本考古学七　―現代と考古学』岩波書店
勅使河原彰　一九八五　『日本考古学の歩み』名著出版
勅使河原彰　一九八八　『UP考古学選書1　日本考古学史―年表と解説』東京大学出版会
久永春男先生頌寿記念論集刊行会編　一九九八　『「野帳の会」考古学論集―久永春男先生頌寿記念―』久永春男先生頌寿記念論集刊行会
田中琢・佐原真編　二〇〇六　『日本考古学事典』三省堂
森分孝治　二〇〇〇　「地理歴史科教育の教科論」社会認識教育学会編『改定新版　地理歴史科教育』学術図書出版会
宮原武夫　一九七四　「歴史教育と地域の文化財」甘粕健編『〈地方史マニュアル九〉　地方史と考古学』柏書房
土屋武志　二〇〇八　「歴史は解釈力　―考える市民を育てる歴史学習―」『階』No8．二〇〇八年一一月　帝国書院
臼井嘉一　二〇一〇　「戦後日本教育実践史の新段階と『場の教育』『シティズンシップ教育』」二〇〇七-二〇〇九年度科学研究費補助金［基盤研究（B）］『戦後日本における教育実践の展開課程に関する総合的調査研究』研究成果報告書（第七集）論文集（研究代表　臼井嘉一）

※本稿は、二〇一〇年度・日本社会科教育学会第六〇回全国研究大会（筑波大会）において発表した内容をもとにして作成したものである。資料収集に際し、東海市教育委員会の諸氏、知多市歴史民俗博物館　石川秀男氏、杉浦理恵氏より、ご協力をいただいた。また、研究の視点に対し、愛知県埋蔵文化財センター　永井宏幸氏、早野浩二氏より、ご助言をいただいた。末尾ながら記して感謝に代えたい。